
君を知っている

黒檀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を知っている

【Nコード】

N6188Q

【作者名】

黒檀

【あらすじ】

「僕」と「ちか子」は幼馴染だけど、ちか子はそれを拒絶する。僕はちか子を知っているようで、全く知らない。ライトなお話。

ちか子はハンバーガーが嫌いだ。

というか、ミンチ肉が嫌いだ。

それを知るのは、本人を除けばこの場には僕だけしかない。

僕は珈琲屋に行こうぜと提案した。けれど、腹が減っているみんなが選んだのは、このファーストフード店だ。

腹ごなしがしたいのなら、安いファミリー・レストランとかでも構わないのだ。ちか子がそれを主張すれば、みんなは快くOKしてくれるはず。でも、彼女は何も言わなかった。涼しい顔でみんなに従っている。薄気味悪い。

みんながバーガー・セットを注文するなか、ちか子はカフェオレしか頼まなかった。腹が減っていないんだと嘯いたけど、腹が減っ
ていようがいまいが、ちか子は絶対にハンバーガーを食べたりしない。

昔から、そうなんだ。

僕は、幼稚園のときからずっと、そんなちか子を知っている。

「で、どうするよ」

ストローをかじったままのアサクラは、ふがふがとした声で言った。ちゃらんぽらんな会議開始の合図に、僕らは意見を練るふりを始めた。ようするに何も考えてない。

来月の頭に文化祭が控えている。クラス展示のために、学級委員長であるアサクラは、特別に評議会チームを組んだ。この五人の内訳は、以下のとおり。学級委員長、副委員長、書記、そして二人の

「文化祭振興委員」。ちなみに、ちか子と僕がそのありがたい委員サマだ。くじびきで偶然選ばれたにしては、できすぎている。

僕らのクラスの出し物は、ありがちに、コスプレ喫茶ときた。ありがちなだけに、他のクラスとかぶっている企画でもある。だからこそ独自性が必要だろ、というのがアサクラの論であって、クラスメートも彼の熱意に賛同している。とはいえ、具体的な審議はこの評議会に任されているのだから責任重大だ。

「市川さあ、なんかねえの。グツとくる衣装」

アサクラは、投げやりに僕にパスを寄越した。さすがにだれてきたと見えて、彼の目には覇気がない。なにしろ、学校での審議を含めれば、僕らはすでに三時間以上はこうして額をつき合わせていることになる。

「……来賓にウケそうなのでいいんじゃないの」

「ごまかすなよ。おまえも男なら、好みの一つぐらい照れずに披露しろ」

ごく一般の男子のツボなら、お前の方が詳しいだろ。僕は「好みなんてお気楽なものを持っていない。」

「言っておくけど。オタク狙いの衣装はやめてよね」

書記である森本は、他クラスの計画書をパリリとめくりながら言った。その通りだ。メイドだのゴスロリだの、そんなのはごめんだ。できれば、まともであってほしい。その衣装は、ちか子も着ることになるだろうから。

対角線上に座るちか子を盗み見た。

彼女は、ななめ向かいのアサクラに熱っぽい視線を送っている。それを見て、（余計なお世話だろうけど）ハラハラする。そんな調子じゃ、恋愛感情がだだ漏れじゃないか。と思っただけど、やっぱりどうだか。ちか子のことだ、アサクラに気付かれるのもまた良しとして、あえて見つめているのかもしれない。それならいい

んだ。想いを隠しているわけじゃないなら。

「明石はどう思う」

アサクラは不意に、ちか子に向き直った。わたし？ と、分かりきっているのに首をかしげる。

「そう。配膳係は全員女子だろ。やっぱり、当事者が着たいのを着させるのがセオリーじゃねえ？」

「ちよつと、私も女子なんですけど」

森本がひじで突きながら横槍を入れる。ちか子の笑みがちよつと黒くなる。

「みんなが決めたものなら何でも着るけど」

「ええ？ たとえばさ、男装しろって言われたとして、チ力はそれを着られるわけ」

副委員長は顔をしかめてみせた。私はそんなのごめんだ、と言っているようだ。

「別に平気だなあ。普段経験できないし、楽しそう」

「じゃあ、メイド服でも？」

「デザインが可愛いじゃない」

「うへえ。私は厭だな。なんか女性性を踏みつけられている感じ」
「だとしても、着るのはたった二日間、しかもシフトの間だけだよ」
「ふうむ、と副委員長と森本は恥じ入るように黙り込んでしまった。逆に、気をよくしたのはアサクラだ。」

「女子のみんながみんな、明石みたいに据わつてるといいんだけどな。決議が気に食わねえと、ヒステリックに抵抗する奴は絶対いるんだよ、」

うんざり顔でドリンクを吸い込んでいる。「ゾゾゾ」と吸う下品な音は、彼の倦怠を代弁しているようだ。彼は、今言ったようなもるもろの反乱を均さねばならない立場なので、苦勞が絶えないのだろう。同情する。

でも彼は一つ勘違いしている。ちか子をオアシスと思っているようだけど、実のところ彼女はそんなに物分りのいい奴じゃない。お

まえの前だからこそこの、「この」ちか子だ。
わからないものなのか。ちか子は相当に性格が悪い。

結局、案が六つくらい出たところで今日の会合を終えた。明日のクラス会議で決をとる仕組みだ。副委員長と森本は六つの案すべてに異議を唱えたが、アサクラの強引さと、ちか子の（見せかけの）柔軟さが勝った。

解散したときは、既に十時をまわっていた。急がないと、僕とちか子は最終電車に乗り遅れる。僕らは隣県からこの街の高校に通っている。店を出たとたん、彼女は「終電だから、じゃあね」と言い残し、そそくさと走り去ってしまった。夜も遅いし、一緒に駅に向かおうと思ったのに。彼女の長い黒髪と紺のブレザーは、あつという間に夜闇と人ごみにとけた。

どうせ同じ電車に乗るのに、彼女は一人で駅に向かう。

僕とちか子の関係性を知る森本は、僕に向かって呟いた。

「あんたたち、終電一緒でしょ？」

あの子、逃げるように去っていったね。と笑われた。不愉快なので黙っていると、気の毒そうに肩をたたかれた。

「そうか。市川はチカに嫌われてるんだ」

彼女はつま先からてっぺんまで僕を眺め回す。いや、僕はそれなりに背が高いから、つむじまでは見られなかったけど。

「まあ、市川は……なんていうか、市川だからね。それに比べて、チカの可憐さときたら。あんたと一緒に並んで歩きたくないんじゃない？」

森本のなかで、「市川アキラ」の人物像には特色が無いらしい。正直すぎるのでちょっと殴ろうかと思った。

「はは。……森本は、比較的あいつのことを分かっているみたいだね」

ちか子は、僕と幼馴染であることを高校の連中に知られたくないのだ。とくに、アサクラには。

僕とちか子は、幼稚園から一緒だ。たしかに、家が隣だったりいつも一緒に遊んだり……なんていう経験はない。でも、あの小さな村をホームグラウンドにもっているという共通意識は、混沌とした街に出るからこそ強くなる。遠く離れた大きな都市の・大きな高校に通えば、同郷の者として・幼馴染として互いを認識しないわけにはいかない。それを彼女はかたくなに拒否している。酷い話だ。

電車に乗り込んで数十秒後、列車は走り出した。最後尾の車両には、ちか子はいなかった。

ゆっくりと列車が走り出し、僕も進行方向と同じく列車の中を移動する。都会の街のあたりが、するすると通り過ぎていく。パチンコ屋のレーザー、ラブホテルのネオン、カラオケ屋の看板。レコード屋の電光掲示板、お洒落なカフェのやわらかな橙。これらの雑多な風景は、僕の日常にすっかり染み付いている。すべてが村とは縁遠くて、いくつかは、ちか子にも馴染みのもの。あ、もちろん健全なものだけ。

彼女のおもての顔は、アサクラのために作られたものだということも、僕は知っている。それを演じることは苦痛なんかじゃないだろうし、今や己の一部として馴染んでいるんだろう。変化じゃない。使いこなしているだけなのだ。

山出しの田舎者であるのは、もはや僕だけか。

一両目の最前列に、彼女は一人で座っていた。そんなところに座って、僕に見つからないようにしたつもりだろうか。だれよりも美

しい緑髪は、隠しようがないのに。

右手では、カチカチと携帯電話を熱心に打っている。左腕はしどけなく窓のふちに乗せている。そろりと下を向いた指先が、とてもきれいだ。しばらく観察していたかったけど、中断して、彼女の隣に腰を下ろした。

彼女はピクリと肩を揺らした。

「ちょっと。隣に座っていいなんて言っていないけど」

この、“対・市川アキラ用”に作った低い声。もともとが細い声だから、無理してるのがわかる。

「席は自由だろ」

「他にも席は空いてるでしょ。どっか行ってよ」

携帯を打ったまま、こちらを見ない。不機嫌そうだ。ほんと、性格悪い。裏表は激しいし、人を傷つけるのを厭わないし。それって人間としてどうなんだろう。

「冷たいな」

「冷たくされたくないなら、近寄らないで」

「やだ」

彼女はパチン、と携帯電話をたたんだ。たたんだそばから、受信のランプが桃色に光る。桃色が象徴するものは何か、分からないほど鈍感ではない。

「ねえ、空気読んでよ。一人でいたいのに」

「どっかの誰かが言ってた。『若者は、空気じゃなくて本を読め』ってさ」

「だから、そういう気色悪い話を聞きたくないの」

「うん。知ってる」

僕は笑って言った。僕らの会話は、お互いの嗜虐性がぶつかり合うことで成り立っている。僕はちか子を苛立たせたいし、ちか子は僕を落ち込ませたい。そんなかんじ。

「……最悪」

再び、携帯の向こうの世界におちていくちか子。

今度は黙っていることにした。ちか子には携帯さえあれば、鬱陶しい僕が隣にいても平気だろう。小さな液晶画面というドアの向こうから、誰かさんが彼女を癒してくれるから。

我が村の駅まで、約一時間。もう五十分は過ぎた頃だった。あたりはすっかり田舎で、線路を照らす光のみが闇に浮かぶ。

一両目の車両が、がこんと妙なかんじに揺れた。なんだ、と思っまもなく、ふっと照明が消えてしまった。

「なんなの、」

隣のちか子が、不安げな声を上げた。彼女に限らず、方々でざわざわと人が騒ぎ出した。停電だ。列車は速度を落とし、ついには止まってしまった。「今から点検作業に入ります、お急ぎのところ、ご迷惑をお掛けします」というアナウンスが入る。

「ああ、もう、最悪。点検って、時間かかるんだよね」

ブレザーのポケットの携帯電話に手を伸ばす。暇つぶしと、光源にはもってこいの小型機器。ところが、数秒と経たずにふっと画面は暗転した。

「……充電切れた」

そりゃあ、あれだけカチカチやってりゃこの時間には切れるだろうよ。しかも、充電切れたぐらいで肩を落とすなんて。

「……アキラのせいだ」

「どんな論理展開だよ……」

高校の知り合いが場にいないと、ちか子は僕をアキラと呼んだ。学校では、「市川くん」なんて呼んじゃうくせに。

「僕のせいにするなよな。アサクラと“話し”てたのは自分の意思だろ」

彼女のポケットの中で、ちゃり、とキーホルダーが動く音がした。

「念のため言っておくけど。メールの相手はアサクラなんだろうなって、なんとなく想像がついただけだから。携帯を盗み見たわけじゃない、」

しなくてもいい弁明をした。どの切り口から僕をあげつらおうか迷っている様子だったので、選別を手伝ってあげた。少なくとも浅ましい真似はしていませんよ、という宣言。

「その話……誰から聞いたの」

見当違いなことを言う。「その話」というのはどの話を指すのだろう。「ちか子がアサクラを好きだ」という話か。

ヨウコ？ マキ？ サナエ？ とクラスメートの名を挙げて聞いてくる。クラスの女子が一丸となって、ちか子の恋を応援しているのだろうか。味方づくりにも余念がないとは恐れ入る。

「誰からも聞いてないよ。教えてもらわなくても、ちか子を見てりや誰でも分かる、」

「見てたあ？ やめてよ。そんなの、アキラが私のことを好きみたいじゃない」

「うん。好きだよ」

大好きだよ。そりやもう、きみの化けの皮も、その中身もぜんぶひっくりめて好きだよ。そんなの、アサクラなんかに分かるもんか。ああ、今夜は僕の勝ちだ。ちか子は衝撃的な顔のまま固まっている。そんな彼女は、僕の想いなんか、今の今まで想像したこともないに決まっている。

僕の携帯電話は生きている。家のナンバーを呼び出した。

「迎え呼ぶけど、ちか子もうちの車と一緒に帰る？」

彼女は二度、小さく頷いた。

迎えに来たのは、僕の兄だった。もう二十歳になる。僕らを拾って車を発進させると、電車の状況を聞いてきた。ふんふん頷いて聞いていたけど、バックミラー越しにこちらを見て言う。

「災難だったな」

「まったくね」

僕は笑い声で答えた。兄のいまの慰めは、まるで、ちか子の心情を察したかのような一言だったからだ。彼女は内心穏やかでないだろう。回復すれば、「キモチワルイ」くらいの罵倒は飛び出すかもしれない。それをどんなに不細工な顔で言うか、楽しみにしよう。

国道から県道に入り、やがて地元民御用達の道に入る。あたりは田んぼと山だらけになる。星と月がとても明るい。兄はラジオをつけた。べつに無音が気まずいからじゃない。星を見るとラジオが聞きたくなるのだ。僕が。それを彼は知っている。

優しい歌が流れていた。目を閉じて聞き入っていると、そっと、手の甲に冷たい指先が触れた。

「アキちゃん、」

ちようど音楽が終わった。DJの間抜けな声が、車内に響く。

「……悪かったよ」

驚いた。罵倒じゃなかった。

驚いたけど、微笑んでしまった。彼女はどうしようもない。どうしようもないほど可愛いんだ。僕の腕は、彼女を力いっぱい抱きしめたいと喚いている。

知加子の恋が僕に向けばいいのにと、今ほど強く祈ったことはない。アサクラを手に入れるために君がする、あらゆる美しくない努力が、ぜんぶ僕に向かえばいいのに。

空にはあんなに星があるんだ。僕のために一つくらい流れたとして。僕以外に誰が知ろうか。

(後書き)

評価不要です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6188q/>

君を知っている

2011年3月9日00時41分発行